

第7回

# 出島橋 —日本で最も古い現役道路鉄橋—

長崎大学名誉教授 岡林 隆敏



出島の東側に瀟洒な鉄のトラス橋がある。この橋が橋長36.7m、幅5.5mの出島橋である。正面から見ると、上の両角に唐草模様の装飾があったり、縦の柱が小さな部材で組み合わせられていて透けて見えたり、大きなボルトで接合されている等、今の橋の形態にない古典的な雰囲気漂わせている。

明治維新以降、長崎市は中島川の流出土砂による長崎港の閉塞に悩まされてきた。そこで、長崎港の改良工事の一環として、中島川が、現在のように

に出島の背後に変流させられた\*。出島が時津新道の始点になり、この港湾工事のシンボルとなるような、斬新な鉄製トラス橋が明治23年(1890)に「新川口橋」として架けられた。この場所は、出島の西の端辺りになる。「新川口橋」は錬鉄製で、アメリカから輸入された橋梁であった。

設計は吉村長策(本河内高部水道施設を設計・監督)が行ったことが、土木学会会長の就任講演から分かる。「河口には鉄製プラットトラスをかけたのでした。これは前に陳べましたワッデル先生\*\*の橋梁講義をききましたので其実行を試みた次第で御座います。」(\*\*当時工部大学校で橋梁工学を担当していた米国人ジョン・アレキサンダー・ロウ・ワッデル(John Alexander Low Waddell)で鉄製橋梁の第1人者)。「新川口橋」は、我が国でも早い時期に架けられた鉄製橋梁であり、珍しさから近隣から見物人が集まったと記されている。

その後時代が20年程経ち、「新川口橋」のさらに河口側に、電車の通行を考えた「玉江橋」が架設されたので、「新川口橋」は不要になり解体されて保管されていた。この頃、出島の東側にあった、木鉄混交橋の旧「出島橋」が老朽化してきた。そこで明治43年(1910)この橋の代わりに、保管していた「新川口橋」の部材を再構成して「出島橋」の橋名を引き継いで、新しい「出島橋」として現在の場所に移設された。

以来、出島橋は長崎市による丁寧な維持管理がされ、原爆にも遭ったが現在まで供用されてきた。「出島橋」は、現役の橋梁では日本で一番古い鉄製橋梁であるので、歴史的建造物として重要文化財級の高い価値に加え、維持管理時代の最重要橋梁として、架設以来125年の我が国の橋梁の最長寿命の記録を日々更新している。

「出島橋」は何より繊細で美しく、時を経ても優雅な、橋の在るべき姿を見せている。

(\* DOVOC通信No.23中島川変流工事跡参照)



架設直後の新川口橋(橋の向こうは出島)